

「看守の家族、洗礼を受ける」

2016年07月09日

使徒言行録 16章 25節～34節。真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げってしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。まだ真夜中であつたが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。

パウロとシラスはリディア一家に洗礼を授け、ヨーロッパで最初のクリスチャンが与えられたことを喜んだ。ところが一転して、投獄された。フィリピの町を騒乱させ、ローマの植民都市で許されていないユダヤ教の風習を宣伝した罪状であつた。しかし、裁判もなしに、問答無用に鞭打たれ、足枷をはめられ、牢の一番奥に入れられた。フィリピの高官から理不尽な扱いを受けたのである。

真夜中頃、パウロとシラスは賛美を歌い、神に祈りを捧げた。他の囚人たちは、死人も出るというローマの鞭打ちを受け、無法に投獄されながらも、神を賛美し、祈る二人に「この者たちは何者なのか」とあつけに取られて、聞き入った。

その時突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動き、全ての戸が開き、囚人たちの鎖が外れてしまった。囚人たちの鎖が外れ、戸が開けば、捕われの身からの解放が彼らの唯一の願いであるから、当然逃げ去る。ところが、逃げずに牢に留まっていた。目を覚ました看守は囚人たちが皆、牢から逃げ出したものと思った。囚人たちが牢から逃げ出せば、看守の責任が問われ、死刑になる。彼は剣を抜いて、自害しようとした。パウロは大声で「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」と叫んだ。あり得ないことが起こった訳である。牢の中で、賛美を歌い、神に祈るパウロとシラスに感銘を受けて、囚人らは逃げ出さなかつたのである。パウロの声を聞いた看守は明かりを持ってこさせ、牢に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、二人を外に連れ出した。そして、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」と聞いた。看守は二人をただの人ではないと思ひ、救われるために何をすべきかを問うたのである。二人は「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」と答えた。更に、看守とその家の人たちに主イエスの福音を語った。

まだ真夜中であつたが、看守は二人を連れて行って、鞭打ちで受けた打ち傷を洗った。そして、看守も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。その後、二人を自宅に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族共々、喜んだ。

フィリピで投獄と地震という思わぬ苦難に遭遇したが、その中から主イエスの福音は伝わっていった。十字架の苦しみに与ることによって、福音が広がる出来事であつた。